

歴史を変えた選挙：カレッジ自治組織の会長選

チェイク（ブータン）

学生 1,700 人と教員 100 人以上を擁するブータン王立大学シェラブツェ・カレッジでは、自治組織「国内・国際啓発フォーラム(FINA)」の役員選挙が毎年年頭に行われます。2018 年 3 月 24 日、FINA の会長選挙がありました。この日は同校にとって歴史的な瞬間として、今後人々の記憶に刻まれるでしょう。その理由は、選挙方法や投票率ではなく、この自治組織の 30 年の歴史において、初めて女性が会長に選出されたからです。

ゾンガ語（国語）と歴史を専攻している 2 年生のソナム・デキさんは、経済学専攻のドルジ・ゲルツェンさんを 147 票差で破り、初の女性会長となりました。

「知の最高峰」という意味の名を冠するシェラブツェ・カレッジが、女性のリーダーシップにおいて先鞭をつけたことで、女性の誇りを鼓舞し高めることとなりました。今後はより多くの女性が立候補し、当選するようになるだろうと、ソナムさんは考えています。

好むと好まざるとにかかわらず、この国内最古の高名なカレッジにおいて、その最高自治組織である FINA の会長をはじめとする役員選挙に出馬し選出されてきたのは、これまで全て男性でした。それはあたかも、女性の出馬が認められていなかったかのような状況だったのです。



2018 年 FINA 会長
(ソナム・デキさん：右から二番目)

これまでの FINA の体制では、役員に就く機会は男性にのみ与えられ、利用されてきました。2010 年までの役員構成は、全体を率いる 3 年生の会長（男性）、2 年生の書記（男性）、1 年生の代表（男性 2 名、女性 1 名）となっていました。しかし学内の活動家グループが、女性にも男性と平等に FINA の会長に立候補する権利と機会が与えられるべきだと主張し、1 年生の代表 2 名と 2 年生の書記 1 名を女性が務めることができるよう大学当局に求めました。同様に、3 年生の女性に対しても会長に立候補する機会が平等に与えられるよう求めたのです。

そのために戦う価値はありました。大学当局がこの訴えを認めたからです。

驚いたことに、この訴えが認められた翌年の 2011 年に、ゾンガ語（国語）と英語を専攻する 2 年生のティンレイ・ザンモさんが初の女性書記に選出され、一年後には副会長になり

ました。この時すでに、時代の流れは変わりつつありました。女性も男性と同じようにいかなる職務も果たすことができ、また人々はジェンダーに関係なくそれを受け入れるのだという事実を示したのです。

それ以降、女性も FINA の重要なポストを男性と等しく担うようになりましたが、会長の座には常に男性が就いていました。そして前述の訴えがなされてから 8 年経った今、ついに FINA 初の女性会長の堂々たる誕生に至ったのです。



選挙直後、教員の一人と

「女性に出来ないことなどありません。ただ、女性がリーダーになる機会を与えられることが必要なのです」とソナム・デキさんは言います。彼女はさらに、能力に男女の差など存在せず、男女が等しくないというのは作り話である、と主張します。現在ソナムさんをはじめとする学生たちは、大学当局は全ての学生に対して平等で同一の立場と機会を与えている、という見方をしています。

「これはシェラブツェ・カレッジ初の快挙です。教養ある人たちの間では男女不平等の問題はもはや存在しないということが示され、嬉しく思います」と語るのは、ソナムさんに投票した 3 年生のカルマ・ワングモさんです。

ソナムさん自身も驚いたのですが、彼女の示してきた力量をカレッジの男子学生が皆笑顔で認めたのです。

「ステレオタイプな見方から解放され、女性もあらゆることに参加できるこのカレッジの一員であることを誇りに思います」と述べるのは、やはりソナムさんに一票を投じたテンジン・ドルジさんです。テンジンさんはさらに、自治組織の 30 年の歴史において初の女性会長を自分たちが選出し、歴史を作ったという事実にも誰もが圧倒されている、と学生たちの気持ちを代弁しました。

一方、会長に就任するソナムさんは次のような抱負を語ってくれました。「カレッジは周囲の社会と緊密で良好な関係を既に築いていますが、それをさらに発展させていきたいのです。そうすることで、大学関係者以外の人々とも連携してアルコール、失業、廃棄物管理、責任ある行動、といった国内のさまざまな問題に関する啓発活動に繋げていきたいと考えています。」